

園長だより NO63

桜が咲き、街中がやわらかい彩に変化して心も穏やかに和みます。

桜のおかげで心が和むものの、子ども達とお別れの時期でもあり少々、複雑な気持ちを抱きます。

沢山の楽しい思い出をつくれたことに感謝し、子ども達を中心にした保育を行えたことに嬉しさを感じています。

卒園おめでとう

大切な幼児期を一緒に過ごせた幸せ

保育園は生後 6 か月からの受入れであり、殆どの子どもは 6 年間、このおおぞら保育園で過ごす。

寝返りの瞬間、つかまり立ちの瞬間、はじめの一步の姿、お母さんやお父さんよりも先にお子さんの育ちを目前でみることがある。

お子さんの育ちを喜び、保育士同士で喜び合い、この子のためにといろいろと考え、関り育てている。苦勞も多い、仕事もきつい、つらいと思う場面もあったろうが子ども達の成長に励まされ、背中を押され、一人の人間として、保育者として成長できる力をもらっていた。

その昔、生まれたての赤ちゃんは無力だといわれた、そのすべてを大人に委ね依存していると考えられた、母乳を与えられ、おしめをかえられ、生きていくために大人の力を借り

なくては生命の維持はできない。だから無力なものだと言われていた。

現在の見方は変わった、脳科学の進歩、乳幼児の世界の解明が進み、無力どころか有力なものである。胎児のときから自ら考え動いている。

実際、保育園の子ども達をみていると持っている力が湧き出ていることがわかる。無力であるとはまさに「死語」である。

言葉がままならない子ども達も自分の意思をしっかりと伝える。大人は言語での伝えでコミュニケーションをはかるが、乳児は身振り、手ぶり、言葉にならないが発語によりコミュニケーションをはかる、いろいろな手段、手法をつかひなんとか自分の思いを相手に伝えようとする。

大人よりはるかにコミュニケーションツールを持っているのが乳児ではないかと思う。

だから大人(保育者)は子ども達にはしっかりと向き合うことが要求される。※本来は自然とできなくてはならないのです。

気持ちのない語り掛けや応答は見抜かれてしまう、その子の心情に寄り添い、丁寧に応答してあげること、内面を理解してあげることが大人の働きかけの基本になる。

乳児に限らず、幼児になっても驚かされるばかりの力をもっている。僕たち、私たちの生活を子どもながらに考え、つくっている。

5 歳児ともなれば保育園の子ども社会の中では一番の年長者、自ら考え、判断し仲間との協働によりいろいろなプロジェクトに挑んで

いる。

つい先日、飯盒炊飯を行った。卒園間際のタイトなスケジュールであったので準備はほぼ大人がやってしまったが火起こしからまきの管理を程よくまかせてみた。説明の理解も飲み込みも早い、分担分業もそれなりに考えていた。 ※本来はすべて子ども達でやります。

大人があれこれ言わずにも子どものコミニティーで活動は成立しています。※火を使う事で気持ちが高揚して穏やかに事が進まない場面もありました。



この幼児期の大切な時期にかかわり、生活を共にできることは私たちにとってこの上ない幸せである。

その昔、無力だと言われていた赤ちゃんはいまは有力な存在になっている。

子ども達は日々、様々な力を獲得し蓄えていることを生活の中で実感する。

すくすくと育てている子ども達、その育とうとする子ども達を思い、考え、頭を悩ませ適切な保育を考えている保育士には頭が上がらない。巣立つ子ども達がより良く成長した

ことに感謝しかない、保育園で一緒に生活できたことが至福の時を刻んでいることになっていた。

1 年が終わる。 また新しい 1 年が始まる。
1 年の始まりには誰もが目標なり自己の課題に向けた取り組みをあげていく。

私も毎年のこと、両手に抱えきれないほどの目標なり課題を持つ、1 年の終わりに猛省するのだから、多くの課題が克服されないで終わる。翌年度に持ち越しである。どんどんと溜まり今では押しつぶされそうになっている。

子ども達の「えんちょー！」の掛け声が押しつぶれかかる私を救う。

子ども達のため、「もう一旗あげようかと大げさな気持ちになる。」

コロナ渦での 1 年、園長職はいろいろなことを決断し方向性を出すことになった。

とある保育園長はその重圧に心を痛めていた。自分ですべてを抱え込んでしまえば身もふたもない。

保育は先生(保育士)あつてのこと先生が実直に職に向かい合いコロナとの共生を苦勞が多い中でもしなやかにさばっていた。

ああ、いいスタッフに恵まれたなーと実感する。保護者にも恵まれた、我が子のため、我が子の生活の場である保育園に協力する姿勢に感謝しかありません。次の年も良い意味で程よく頑張ろうという思いがふつふつと湧いてきている。

(園長 廣部信隆)